熊本大学
Kumamoto University

科学技術人材育成費補助金
「女性研究者養成システム改革加速」

「バッファリングによる女性研究者養成の加速」

事業報告書

［平成 22-26 年度］

国立大学法人熊本大学学長
谷口　功

本学は、「人の命、人と自然、人と社会」の諸科学の深化を通し、教育と研究のバランスある発展を図り、その成果を社会に還元することを社会的使命としています。幅広い教育研究を展開し、社会に貢献する多様な人材を排出していくためには、個々の能力が十分に発揮される環境整備、とりわけ女性研究者の積極的な採用・登用を加速する取組みが重要と考えています。

本学では、平成11年の男女共同参画社会基本法の制定を契機に、男女共同参画社会の実現に向けた取組みを始動しました。平成19年3月26日に「国立大学法人熊本大学男女共同参画推進基本計画」を策定し、以来、職場と家庭の両立支援、機会均等の実現、意識改革、政策・方針決定過程への女性の参画拡大などの取組みを展開しています。平成 25 年度からは、山縣ゆり子副学長が男女共同参画推進室長に就任し、取組みをさらに強化するとともに、女性研究者支援の取組みの県下での普及活動も開始しています。また、平成25年と本年２月には、関連環境の整備に関して「くるみんマーク」も取得しています。

平成22年度に文部科学省科学技術人材育成費補助金女性研究者養成システム改革加速「バッファリングによる女性研究者養成の加速」が採択されました。本学大学院自然科学研究科において、理・工学系の優れた女性研究者を採用し、早期にキャリアアップできるよう様々な支援が行われています。この取組みによって、女性研究者の増加はもとより、上位職階女性研究者の増加、教育・研究の活性化など、効果は顕著に現れています。

本冊子は、この５年間の取り組みの総括として編集いたしました。今後、本事業の取組みで得られた教訓を活かし、全学事業として継続、発展してまいります。結婚、出産・育児等のライフイベントと教育・研究を両立させ、夢の実現を諦めない女性研究者を、これからも積極的に支援してまいります。

目　　次

事業概要…… 2
事業の実施体制…… 3
女性研究者の公募・採用実績…… 4
女性教員数の推移…… 5
女性研究者のための制度…… 6
活動実績一覧…… 11
アンケート結果…… 12

事業概要

熊本大学における「バッファリングによる女性研究者養成の加速」では、大学院自然科学研究科において理学および工学系の優れた女性研究者を養成することを目的とし、予め定めた採用計画に従って女性研究者を雇用し、人材の多様化、研究の活性化および男女共同参画事業の推進に取り組んできました。このための全学的支援として全学措置席（バッファ席）を準備し、当初３年間は新規採用した女性研究者をここに配置し、支援期間終了後は自然科学研究科へ異動させます。また、新規採用女性研究者への多様な支援により早期のキャリアアップを推進しています。

平成 18 年～ 20 年度　科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業
「地域連携によるキャリアパス環境整備」による事業推進

平成 19 年～ 28 年度　熊本大学男女共同参画推進基本計画に基づく本学独自事業を推進

平成 22 年～ 26 年度　科学技術人材育成費補助金「女性研究者養成システムの加速」事業
「バッファリングによる女性研究者養成の加速」

平成 25 年～ 27 年度　科学技術人材育成費補助事業
「女性研究者研究活動支援事業（拠点型）」

第一段階
事業による全学措置席（バッファ席）を用いた女性研究者採用

全学措置席（バッファ席）で採用
本取り組みでの支援期間：３年間
雇用経費ー 300 万円：全額負担

事業実施期間		自然科学研究科席へ異動
H22	２名採用	２名異動
H23	３名採用	３名異動
H24	３名採用	
H25	２名採用	
H26	３名採用	
H27		３名異動
H28		２名異動
H29		３名異動
H30		
H31		
H32		
H33		

支援期間
３年間終了後

H25 ～ 26 年度採用者の
自然科学研究科席に異動するまで
の雇用経費は全学で負担

第二段階　本学女性研究者養成支援制度による
バッファ席を用いた女性研究者採用

		採用部局席へ異動
H27	２名採用	
H28	２名採用	
H29	２名採用	２名採用
H30	２名採用	２名採用
H31	２名採用	２名採用
H32		２名採用
H33		２名採用

２年間の全学的
雇用経費支援

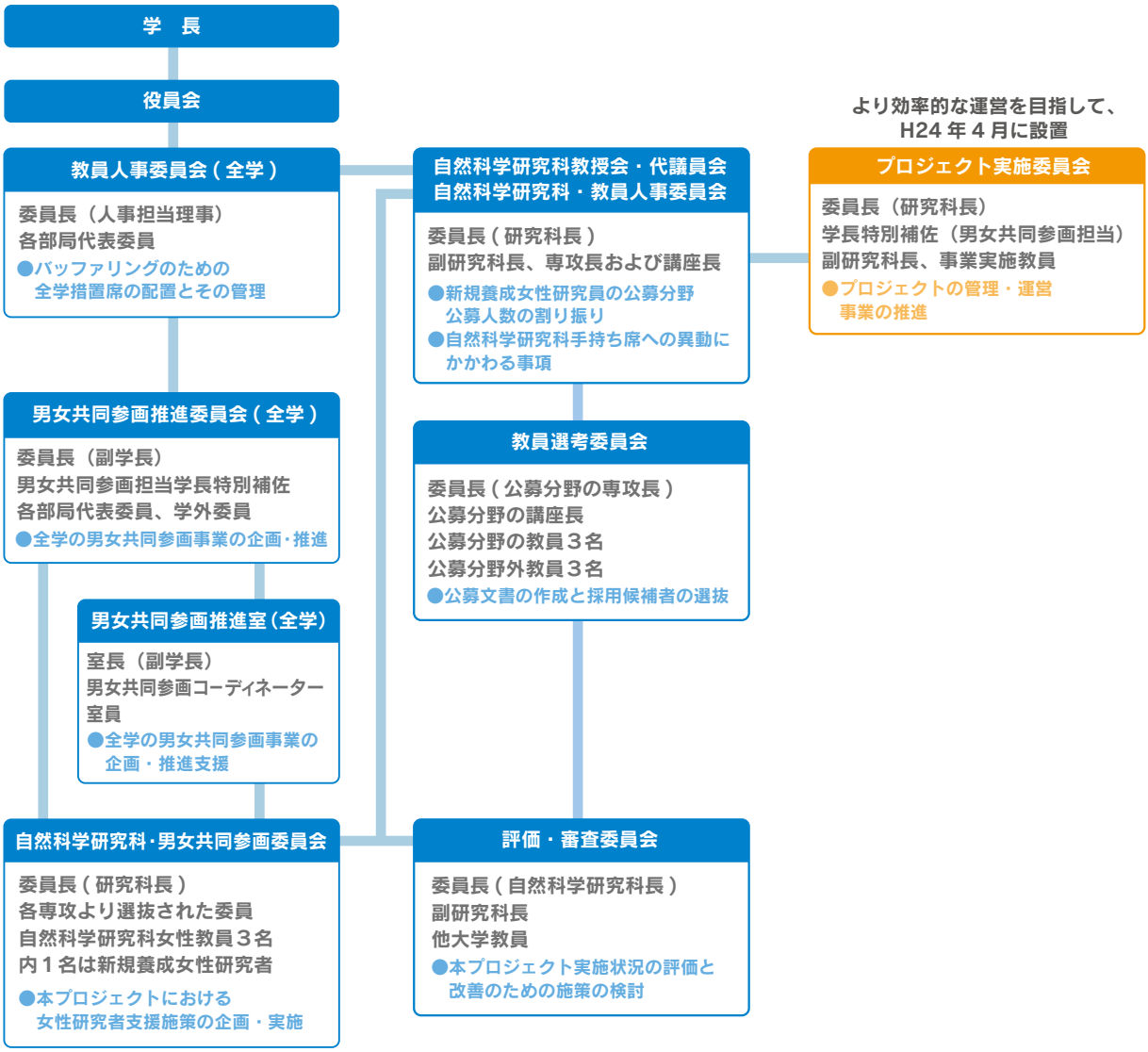
安定した雇用の継続と早期のキャリアアップ

平成 20・21 年度 研究科長

大学院先導機構 卓越教授
檜山　隆

私が大学院自然科学研究科長を務めていた当時の本研究科の女性教員比率は 3.5% でした。本事業実施期間終了後、本研究科女性教員比率を８％程度まで上げ当時の全学目標であった女性教員比率 15% を達成するため、全学の支援のもとでの事業計画を立案し、申請書を準備しました。本事業で雇用した女性研究者を最終的に大学院自然科学研究科教員席へ移す前のバッファー席として全学措置席（学長手持席）を使用させていただくこととし事業名称は「バッファリングによる女性研究者の養成加速」といたしました。この学長手持席を利用させていただくこと、また、大学院自然科学研究科における団塊の世代の定年退職者増等を考慮し、本事業で雇用する女性研究者の大学院自然科学研究科教員席への移籍が順調に進むように配慮しました。本事業がこの５年間順調に推移し、当初の目標を達成できたことは関係者全員の努力の賜物であり、本プロジェクトの立案・申請に係った者として大きな喜びを感じるとともに今後の事業継続に大きな期待を寄せています。

事業の実施体制



本事業の申請から採択までを担われた檜山前自然科学研究科長より、この事業の実施を引き継いだ時は、正直荷が重く感じられました。その最大の理由は、男女共同参画の理念が学内に十分に浸透していないことにありました。さらに檜山前科長のご指導の下で、着々と準備が進められていた工学系と異なり、十分に事前の準備ができていたわけではない理学系での実施は困難を極めました。とりわけ女性限定公募に対する反発は強く、逆差別だとの声さえあり、説得は難しかった。幸い、理学部長や学長の協力があり、何とか予定通りに採用が叶いました。採用だけでなく、採用後の女性教員の養成にも課題を残した感があります。それはメンター制度です。各女性教員に３人のメンターをつけましたが、メンターによりいわば温度差があり、熱心に女性教員を指導したメンターもいた反面、ほとんど機能しなかったメンターもいたようです。メンター制度を正しく理解してもらったかどうかさえ怪しい所がありました。メンターに対する教育も必要だと強く感じました。

平成 22・23 年度 研究科長

大学院自然科学研究科 教授

西山　忠男

女性研究者の公募・採用実績

採用年度 平成 （補助対象採用目標人数）	公募分野・部局		新規養成女性研究者採用数（補助対象取組）		
			日本国籍	外国籍	計
22 年度 （2）	理学系	理学専攻　地球環境科学講座	1 助教	0	1
	工学系	産業創造工学専攻 物質生命化学講座	0	1 助教	1
23 年度 （3）	工学系	産業創造工学専攻 先端機械システム講座	1 准教授	0	1
	工学系	産業創造工学専攻 マテリアル工学講座	0	1 助教	1
	工学系	情報電気電子工学専攻 機能創成エネルギー講座	1 准教授	0	1
24 年度 （3）	理学系	理学専攻　生命科学講座	1 准教授	0	1
	工学系	環境共生工学専攻 社会環境マネジメント講座	1 准教授	0	1
	工学系	環境共生工学専攻 循環建築工学講座	1 助教	0	1
	工学系	産業創造工学専攻 マテリアル工学講座	0	1 助教	1
25 年度 （2）	工学系	環境共生工学専攻 社会環境マネジメント講座	1 准教授	0	1
26 年度 （3）	工学系	情報電気電子工学専攻 先端情報通信工学講座	1 助教	0	1
	工学系	産業創造工学専攻 マテリアル工学講座	0	1 助教	1
	理学系	理学専攻　化学講座	1 助教	0	1
27 年度 採用予定	工学系	環境共生工学専攻 人間環境計画学講座	平成 26 年度公募開始		
	理学系	理学専攻　化学講座	平成 26 年度公募開始		
総計			9	4	13

平成 24・25 年度 研究科長

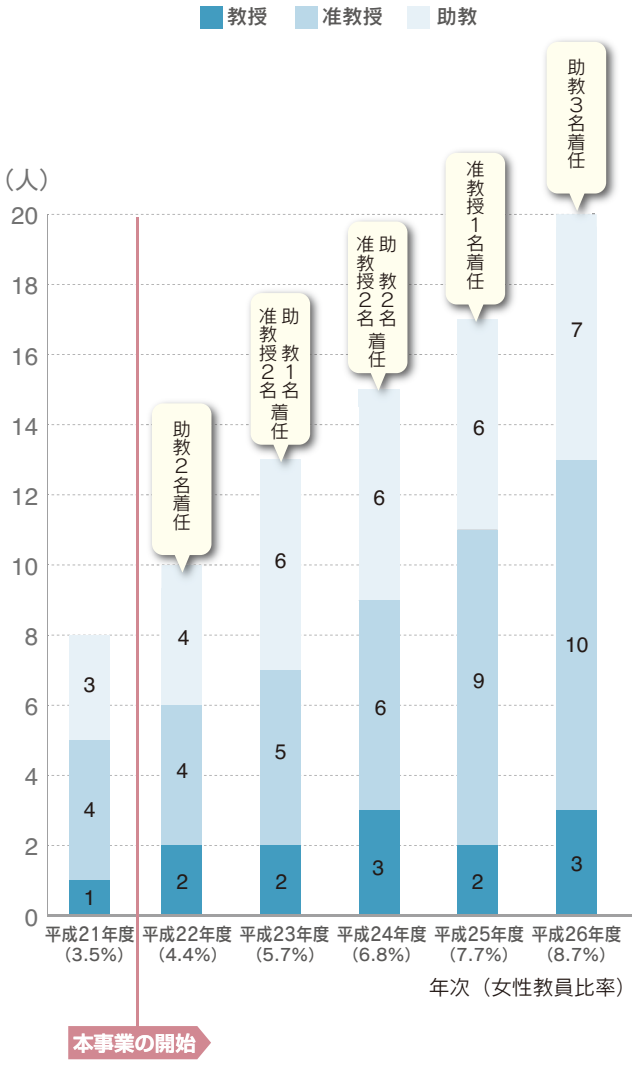
大学院自然科学研究科 教授
高島　和希

我が国の活力を維持していくためには、女性の力を十分に発揮できる社会の構築が必要とされています。研究の世界も同様で、優秀な女性研究者を増やすことが、研究の活性化には重要です。本学においても、本プログラムの実施により、意識改革が進み、女性研究者の割合も増えてきました。しかし、理学、工学の世界、特に、工学の分野では女性研究者の割合は依然として低い状況にあります。これは女子学生の割合が低いことに起因しています。したがって、今後は小・中学生の女生徒に対して、理学、工学の魅力を伝える長期的な取組みを通して、女子大学生・大学院生を増やす施策が必要と思われます。また、本プログラムでは、一度ポスドクを含めて職に就いた女性研究者を対象に、大学の教員に採用させるものとなっていますが、次世代を担う女子大学院生に対する支援、博士の学位を取得後すぐに教員として採用できる制度の構築も必要と思われます。本学においても、女性研究者がいきいきと活躍できる環境整備を進め、女性研究者が輝く大学へ向けた取組みを今後とも続けていきたいと思っています。

女性教員数の推移

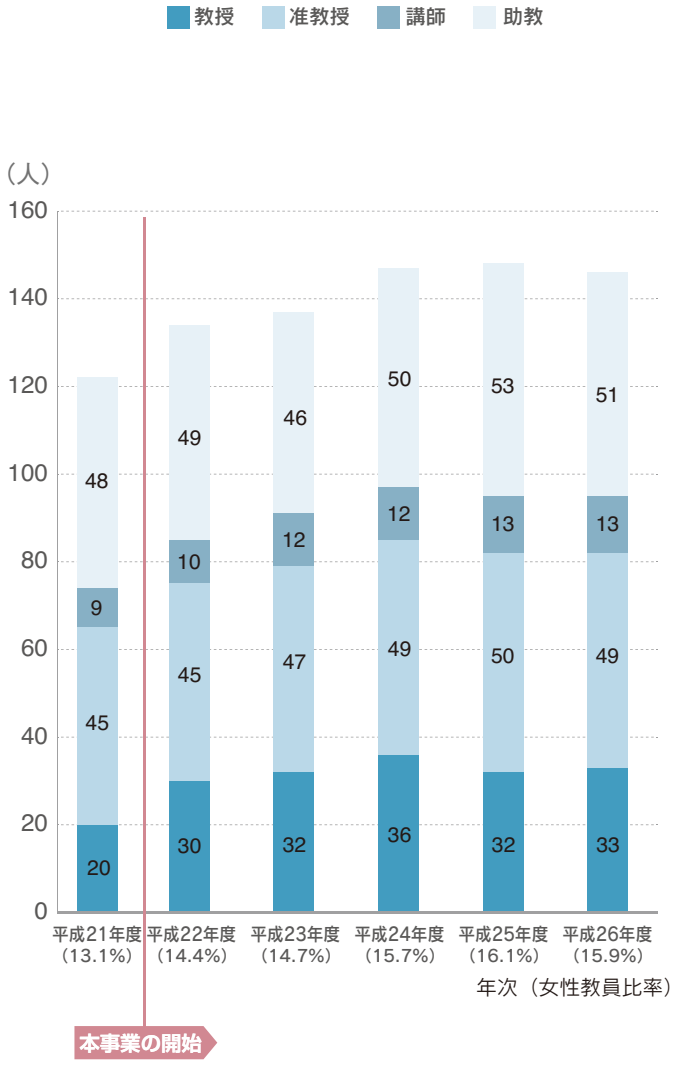
自然科学研究科職位別女性教員数の推移

（各年５月１日現在、平成26年度は27年３月末実績）



全学職位別女性教員数の推移

（各年５月１日現在）



私は、本事業５年間の最後の１年間、研究科長として参画させていただきました。人間社会は基本的に男性と女性で構成されており、両方のジェンダーによりいろいろな問題を解決していくことは社会的に当然のように思います。しかし我が国の男女共同参画の実態は世界的に見てもかなりの後進国であると言えます。大学においても特に理学・工学系の女子学生数は上昇傾向にあるにもかかわらず、女性教員数は少ないのが現状です。今日の社会や経済の多様化・国際化への対応は我が国における主要課題であると言えます。これらの問題を解決するためには社会の構成員である男女両方の力が不可欠であると考えます。自然科学研究科としては幸いにして本事業の下で女性教員加速の目標値を達成することができましたが、今後は全学的な男女参画事業の整備に加え、ただ単に数が増えるだけではなく、男性・女性に関係なくグローバルに活躍できる教員の加速をめざす必要があると考えており、研究科としてその支援を継続的に行っていきたいと思っています。

現研究科長

大学院自然科学研究科 教授

大谷　順

女性研究者のための制度

本事業で採用した女性研究者に専用の研究スペースを用意し、特別な研究費を支給することで、着任直後から自立した研究が行える体制を構築しました。また、自然科学研究科の全女性教員のスキルアップを目的に、学会参加経費の補助等の支援を行いました。

1）新規採用者への研究費の支給

初年度 150 万円、その後 2 年間 100 万円の研究費を支援しました。

2）研究教育スキルアップ経費の支援

自然科学研究科の全女性研究者に対し、国際学会参加のため、および英文校閲のための経済的支援を行いました。

3）研究スペースの配置

新規採用者に専用の研究スペースを用意しました。

4）メンター教員の配置

既在籍女性研究者 1 名を含む 3 名のメンター教員を配置し、新規採用女性研究者のサポートを行いました。

5）研究支援雇用経費の支給

自然科学研究科の全女性研究者に対し、出産・育児・介護期間中に研究支援員を雇用できる体制を構築しました。

6）Women in Science の開催

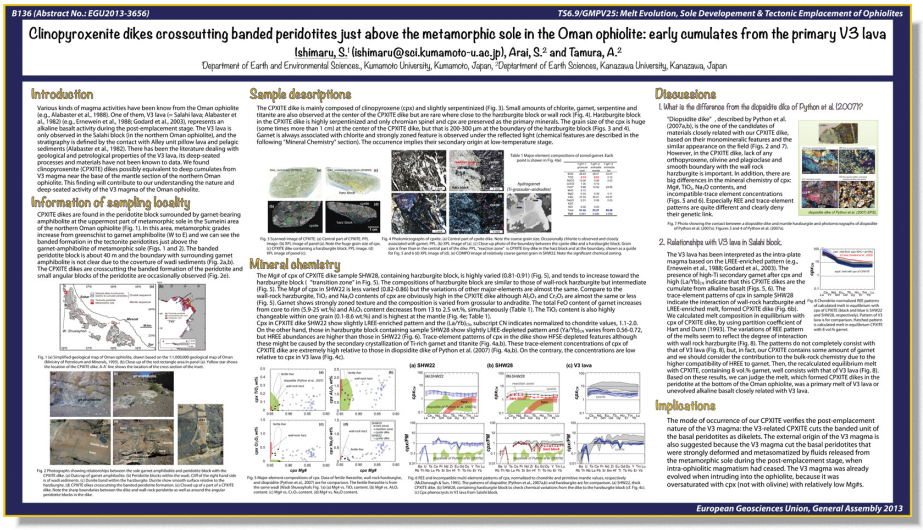
自然科学研究科の女性教員と大学院生の懇話会を開催しました。

7）シンポジウムの開催

女性加速事業ならびに男女共同参画に関する講演と、本事業により新規採用した女性研究者の研究発表を行いました。

主な研究スキルアップ支援

	研究分野	平成 22 年度		平成 23 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度	
		学会参加経費	論文英文校閲経費	学会参加経費	論文英文校閲経費	学会参加経費	論文英文校閲経費	学会参加経費	論文英文校閲経費	学会参加経費	論文英文校閲経費
支援件数（支援人数）	理学	8（3）	0（0）	10（4）	0（0）	10（3）	3（2）	6（2）	0（0）	0（0）	1（1）
	工学	11（8）	7（4）	15（6）	2（2）	34（10）	4（3）	24（11）	4（4）	17（8）	5（4）

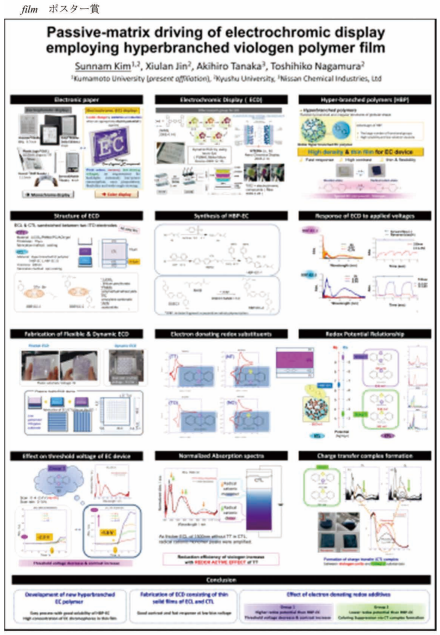


所属・職：	理学専攻 地球環境科学講座　助教
氏名：	石丸　聡子

European Geosciences Union 2013

European Geosciences Union (EGU) 2013 では，オマーンオフィオライト底部に貫入した岩脈についての発表をおこなった。オマーンオフィオライトの研究はヨーロッパ在住の研究者によって盛んにおこなわれており，関連分野の海外研究者と討論することで議論を深めることができ，スキルアップとなった。

Passive-matrix driving of electrochromic display employing hyperbranched viologen polymer film ポスター賞



所属・職：	環境共生工学専攻 人間環境計画学講座　准教授
氏名：	長谷川　麻子

CLIMA 2013: 11th REHVA World Congress & 8th International Conference on IAQVEC

木炭燃焼による CO 発生量に関する研究成果について発表を行い、室内環境を良好に維持し人体に対する健康影響を低減するために、室内での木炭使用は適切ではなく、非常に大量の換気量が必要となることについて注意が必要であることを示した。また、この研究成果についての討議、および、ワークショップ等における議論を通じて、研究テーマの推進やその成果のプレゼンテーション技術のスキルアップになった。

Carbon Monoxide Gas Emissions from Different Charcoals for Indoor Use

Asako Hasegawa[#1], Kei Toda[#2]

[#] *Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University*
39-1, Kurokami 2-chome, Chuo-ku, Kumamoto, Japan
[1]asako@kumamoto-u.ac.jp
[2]todakei@sci.kumamoto-u.ac.jp

Abstract

In Japan, charcoal made from solid wood has been traditionally used for heating in living rooms and even in the present day remains one of the chief items to be admired in "Chano-yu", the Japanese tea ceremony. Charcoal is recognized as an environmental-friendly flammable material and is sometimes utilized for heating and cooking in place of electric power. This was true especially after the 3.11 tragedy in the Tohoku area. However, because of this another tragedy occurred - a number of people died from carbon monoxide (CO) poisoning during the winter of 2011-2012. To help call attention to the hazards of indoor charcoal use, CO emitted from the burning of 8 different charcoals was analyzed and the required ventilation rates were calculated. Our results showed that high quality charcoals burned slower and emitted less CO than low quality charcoals. However, for all of the charcoals tested, regardless of their quality, the required air exchange rate for CO emitted from the burning charcoal considerably exceeded the regulated value in the Building Standard Law of 0.5 h^{-1}. This suggests that for safety's sake charcoal cannot be used in contemporary highly-airtight residences in the same ways as in our cultural traditions.

Keywords - indoor air; carbon monoxide; charcoal; ventilation; energy saving

1. Introduction

Charcoal made from solid wood is used as fuel and is well-known as a source of carbon monoxide (CO). However, CO emission rates from burning charcoal have not been determined in the research field of indoor air environment.

Traditionally, charcoal was used for cooking and heating in an "Irori" sunken hearth placed in the center of traditional Japanese living rooms. Currently, modern Irori, an "Irori table", which is equipped with a hearth in the center of a table, is popular in some homes. This Irori table is convenient and can be placed in any type of room. However, occupants may be exposed to high concentrations of CO if ventilation is not sufficient.

This article was downloaded by: [Kumamoto University], [Masayo Sakata]
On: 25 April 2013, At: 17:25
Publisher: Taylor & Francis
Informa Ltd Registered in England and Wales Registered Number: 1072954 Registered office: Mortimer House, 37-41 Mortimer Street, London W1T 3JH, UK

Journal of Liquid Chromatography & Related Technologies
Publication details, including instructions for authors and subscription information:
http://www.tandfonline.com/loi/ljlc20

EFFECT OF ADSORBENT pK_a ON SELECTIVE REMOVAL OF GLUCOAMYLASE FROM UNPASTEURIZED SAKE MATERIALS

Masayo Sakata [a] , Fumiya Kurogi [a] , Koichi Kai [a] & Masashi Kunitake [a]
[a] Department of Applied Chemistry & Biochemistry, Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University, Kumamoto, Japan
Accepted author version posted online: 08 Aug 2012.Version of record first published: 24 Apr 2013.

To cite this article: Masayo Sakata , Fumiya Kurogi , Koichi Kai & Masashi Kunitake (2013): EFFECT OF ADSORBENT pK_a ON SELECTIVE REMOVAL OF GLUCOAMYLASE FROM UNPASTEURIZED SAKE MATERIALS, Journal of Liquid Chromatography & Related Technologies, 36:11, 1478-1489

To link to this article: http://dx.doi.org/10.1080/10826076.2012.692145

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

Full terms and conditions of use: http://www.tandfonline.com/page/terms-and-conditions

This article may be used for research, teaching, and private study purposes. Any substantial or systematic reproduction, redistribution, reselling, loan, sub-licensing, systematic supply, or distribution in any form to anyone is expressly forbidden.

The publisher does not give any warranty express or implied or make any representation that the contents will be complete or accurate or up to date. The accuracy of any instructions, formulae, and drug doses should be independently verified with primary sources. The publisher shall not be liable for any loss, actions, claims, proceedings, demand, or costs or damages whatsoever or howsoever caused arising directly or indirectly in connection with or arising out of the use of this material.

所属・職：	産業創造工学専攻 物質生命化学講座　助教
氏名：	金　善南

12th International Conference on Frontiers of Polymers and Advanced Materials (ICFPAM 2013)

Electrochromic device consisting of hyperbranched electrochromic polymer に関する研究発表を行った。著名な先生の講演を聞くことが出来、関連研究者との機能性高分子材料や合成、特性評価について研究討論を行うとともに、情報交換を行うことができ、スキルアップとなった。

所属・職：	産業創造工学専攻 物質生命化学講座　准教授
氏名：	坂田　眞砂代

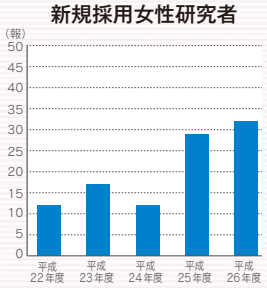
Effect of adsorbent pKa on selective removal of glucoamylase from unpasteurized sake materials

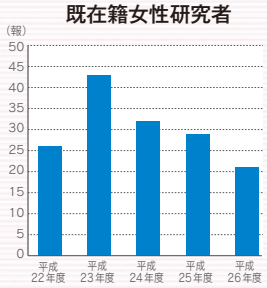
木炭燃焼による CO 発生量に関する研究成果について発表を行い、室内環境を良好に維持し人体に対する健康影響を低減するために、室内での木炭使用は適切ではなく、非常に大量の換気量が必要となることについて注意が必要であることを示した。また、この研究成果についての討議、および、ワークショップ等における議論を通じて、研究テーマの推進やその成果のプレゼンテーション技術のスキルアップになった。

女性研究者のための制度

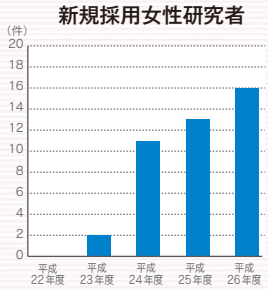
主な女性研究者の活躍

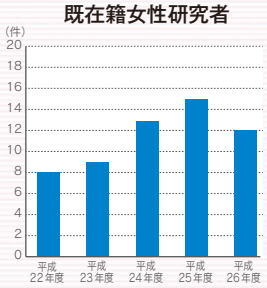
■ 発表論文





■外部研究資金獲得状況（継続・分担を含む）





■ 特許登録申請

坂田眞砂代
1）戸所正美、平山忠一、國武雅司、坂田眞砂代
出願人：チッソ株式会社
発明の名称：エンドトキシン吸着体及びそれを用いたエンドトキシンの除去方法
特許登録 JP 特許2012-4996791　平成24年5月18日
2）坂田眞砂代、中村大輔、松尾拓
出願人：国立大学法人熊本大学、ナガセケムテックス株式会社
発明の名称：エンドトキシン吸着材
特願2014-178237　平成26年9月2日
他２件（特願2012-123281, PCT/JP2013/064905）

2）要約：本開発では、糖ポリマー水溶液のエンドトキシン（リポ多糖：LPS）を選択吸着剤として、酸化グラフェン（GO）をスペーサーとして、シクロデキストリン（CyD）をセルロース粒子に化学修飾することにより、CyD/GO- セルロース粒子ハイブリッド吸着剤を開発した。同粒子は、GO の適度な疎水性とシクロデキストリン由来キャビティの LPS に対する包接能の相乗効果により、LPS 溶液からの LPS を生体環境下に近い水溶液の条件下（pH: 中性付近，塩濃度：0.05-0.8 mol/L）で、30 EU/mL から 0.1 EU/mL まで除去することを可能とした。

宗像瑞恵
出願番号：特許出願2007－66013 出願日：2007年3月15日
公開番号：特許公開2008－224562 公開日：2008年9月25日
出願人：国立大学法人 熊本大学 外1名 発明者：宗像 瑞恵 外5名
発明の名称：異物検査システム、異物検査方法および
異物検査用プログラム

要約：【課題】画像データの処理を用いた異物検査に際して、異物の有無の判定の正確性を向上させることを目的とする。
【解決手段】検査対象物10を撮影して得られる画像の情報に基づき、縦方向の複数列および横方向の複数列に沿ってそれぞれ並べられた複数の画素を有する画像データを作成し、作成した画像データの各画素の輝度値について、縦方向または横方向の少なくとも一方の列毎に平均値または積算値を算出し、隣接する２列の平均値または積算値の差を、列毎の平均値または積算値の微分値として算出し、各微分値が所定の閾値の範囲内にあるか否かを判断し、閾値の範囲外にある微分値の個数に基づき、異物の有無を判定する。

■ 著書

	所属	氏名	著書
女性研究者 新規採用	環境共生工学専攻　社会環境マネジメント	**竹内裕希子**	竹内裕希子・須田雄太・ショウ ラジブ，地域防災における学校施設の拠点性――釜石市唐丹地区を事例として，東日本大震災と被災・避難の生活記録，吉原直樹・仁平義明・松本行真編，六花出版，448-468，2015
	環境共生工学専攻　社会環境マネジメント	**皆川　朋子**	皆川朋子 (2014) コラム 10　流水型ダム湛水域の環境整備事例．ダムと環境の科学 III エコトーンと環境創出 (谷田一三・江崎保男・一柳英隆編)，京都大学出版会
女性研究者 既在籍	理学専攻 生命科学講座	**副島　顕子**	植物名の英語辞典 酒米ハンドブック
	理学専攻　地球環境科学講座	**小島　知子**	NHK そなえる防災　PM2.5　黄砂　コラム執筆

■ 受賞

	所属部署	氏名	受賞の内容
新規採用女性研究者	理学専攻　地球環境科学講座	石丸聡子	平成 22 年度日本鉱物科学会研究奨励賞第 8 回受賞
	環境共生工学専攻　循環建築工学	佐藤あゆみ	第 42 回 (2014 年度) セメント協会論文賞。 「EPMA 分析に基づくコンクリートの鉛直打継ぎの界面処理に関する考察」 著者：佐藤あゆみ・石山智・山田寛次
			2013 年度建築学会大会 (北海道) 学術講演会　材料施工委員会若手優秀発表 「形態的特徴の異なるモルタル界面の付着特性に関する解析的検討」
	産業創造工学専攻　先端機械システム講座	川島扶美子	日本材料学会平成 22 年度学術奨励賞 「発電プラント用高温機器の強度および余寿命評価に関する研究」
	産業創造工学専攻　物質生命化学講座	金善南	SPIE2011 Smart Nano+Micro Materials and Devices ベストポスター賞
	情報電気電子工学専攻　先端情報通信工学講座	松原靖子	第６回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム （DEIM2014）最優秀論文賞

新規採用女性研究者面談および研究室訪問の実施

新規採用女性研究者の活動実態を把握する目的で、プロジェクト実施委員による面談および研究室訪問を行いました。

●面談・訪問者

山縣ゆり子　副学長
大谷　　順　自然科学研究科長
岸田　光代　自然科学研究科・教授

●面談・訪問内容

着任後の「環境」「教育」「研究」「外部資金」「業績」について個別に面談を実施し、確認を行いました。その後、話だけでは見えない点について、研究室、学生実験室など、実際に現地を訪問し問題が無いか現状確認を行いました。

皆さん、研究環境に満足して頑張っています。

メンター会議の実施

新規採用女性研究者のメンターとして、どのような支援を行っているか、また、今後はどのような支援が必要か等、これまでの支援内容の事例紹介などを交え、メンター同士の情報交換を実施しました。

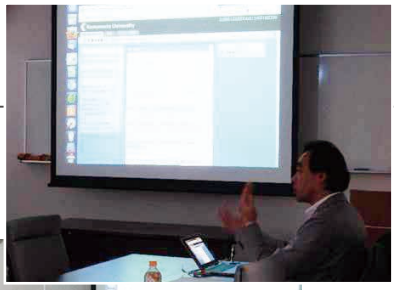
●意見紹介

○メンターがいる事で、大学生活面での些細な事でも、まず誰に尋ねれば良いかが明確で良い。
○メンターを上位職だけに限定せず、（採用されて比較的期間が短い若手の）助教などがメンターとなる事で、採用後すぐの疑問がわかり合え、些細な疑問でも声をかけやすい。採用直後の疑問など経験を踏まえ支援に活かせる。
○女性加速事業で採用された女性研究者より、「（女性の）同年代の友人が出来ない。」と聞いたが、実際の所、女性研究者が少ない為になかなかその相談に答えてあげられない。そのため、女性研究者のネットワークを強める取り組みを行って欲しいとの要望があった。

メンターが配置されていることで、新しい環境による不安が解消された事例が多く報告されました。このような不安は女性研究者に限ったことではないため、今後、全新任教員への制度として波及させる事になりました。

また、女性研究者同士のコミュニケーションが円滑にとれるようにするため、女性研究者のネットワークを構築しました。

女性研究者へのスキルアップセミナー



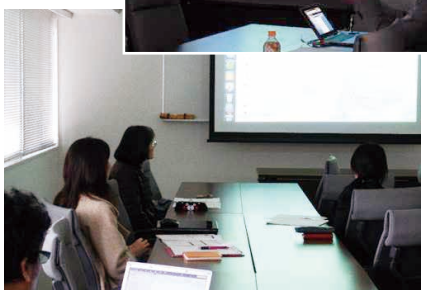
～ e-Learning の活用の勧め～

「先生の講義に e-Learning を導入してみませんか？」

講師：熊本大学　e ラーニング推進機構　喜多敏広 教授

大学院・学部教育を問わず Blended Learning, Flipping など e-Learning に関連する話題が、学術誌や各種メディアに頻繁に取り上げられています。

今回のセミナーでは、e-Learning のいろいろな導入手法について、本学 e ラーニング推進機構の喜多教授に、実例を交えてご紹介いただくとともに、参加人数を限定することで、先生方が担当されている教科を e-Learning 化する際の“コツ”について、相談していただける時間を用意しました。



女性研究者のための支援

シンポジウム

学内外より講師を招き、女性加速事業ならびに男女共同参画の取組みについての講演会を開催しました。また、この事業で新規採用した女性研究者の研究発表を行いました。総括シンポジウムでは、男女共同参画学協会連絡会で実施した大規模アンケートの解析結果と社会に向けて発せられた「提言」をもとに、女性加速事業を実施した５大学（北大、東北大、九大、広大、熊大）の代表者による総合討論を行いました。

平成24年３月26日	特別講演 「九州大学における女性研究者支援加速プログラムの実際」	九州大学
	新任女性研究者による研究発表	平成 22 年度採用　助教 平成 22 年度採用　助教 平成 23 年度採用　准教授
平成25年３月13日	基調講演 「高等教育における男女共同参画推進の現状と展望」	独立行政法人　科学技術振興機構
	講演Ⅰ 「地方大学における男女共同参画推進への期待」	株式会社東芝
	講演Ⅱ 「東北大学　女性研究者育成支援推進室の取組み」	東北大学
	新任女性研究者による研究発表	平成 24 年度採用　准教授 平成 24 年度採用　准教授
平成26年１月28日	特別講演 「神戸大学における女性研究者養成支援の取り組みについて」	神戸大学
	新任女性研究者による研究発表	平成 24 年度採用　准教授 平成 24 年度採用　准教授 平成 23 年度採用　准教授
平成27年１月26日 （総括シンポジウム）	講演Ⅰ 「北海道大学における加速事業の成果、そして今」	北海道大学
	講演Ⅱ 「男女共同参画学協会連絡会・大規模アンケートの結果から見えてくること」	日本大学
	総合討論 ～女性研究者をとりまく現状と未来～	コメンテーター　日本大学 パネリスト　北海道大学 パネリスト　東北大学 パネリスト　九州大学 パネリスト　広島大学 パネリスト　熊本大学 ファシリテーター　熊本大学

Women in Science

女性教員と大学院生が気軽に交流する場として発足し、毎年複数回開催して意見交換を行っています。

開催日	スピーカー	
H22.4.26	理学専攻　地球環境科学	小島　知子
H22.6.29	産業創造工学専攻　先端機械システム講座	宗像　瑞恵
H23.3.1	エーゲ大学 (トルコ)	Radosveta　Sokullu
H23.5.13	理学専攻　生命科学講座	副島　顕子
H23.10.27	スペイン科学研究高等会議環境診断および水資源研究所	Dr. Teresa Moreno
H24.5.17	産業創造工学専攻　先端機械システム講座	川島　扶美子
H24.12.26	理学専攻　地球環境科学講座	石丸　聡子
H25.7.12	産業創造工学専攻　物質生命化学講座	金　善南
H25.12.16	情報電気電子工学専攻　機能創成エネルギー講座	小林　牧子
H26.7.11	De La Salle University（フィリピン）	Prof. Pag-Asa D. Gaspillo

活動実績一覧

実施日	取組内容
平成18年度	科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」「地域連携によるキャリアパス環境整備」事業開始
平成22年度	科学技術振興調整費「女性研究者養成システム改革加速」「バッファリングによる女性研究者養成の加速」事業開始
平成22年4月26日	第4回 Women in Science 開催
平成22年6月29日	第5回 Women in Science 開催
平成22年8月3日～ 平成23年1月7日	新規養成女性研究者公募 （産業創造工学専攻マテリアル工学講座）
平成22年8月9日～ 平成22年10月8日	新規養成女性研究者公募 （理学系地球環境科学講座）
平成22年8月26日～ 平成23年1月21日	新規養成女性研究者公募 （産業創造工学専攻物質生命化学講座）
平成22年8月30日～ 平成22年10月29日	新規養成女性研究者公募 （産業創造工学専攻先端機械システム講座）
平成22年8月31日～ 平成22年11月30日	新規養成女性研究者公募 （情報電気電子工学専攻機能創成エネルギー講座）
平成22年10月18日	学生との座談会　「働く女性」弁護士開催
平成22年11月17日	海外女性教員による学生啓発セミナー「Ghent 大学の紹介と留学について開催
平成22年11月22日	全学的な男女共同参画推進フォーラム「イクメン行政官の育休体験記」開催
平成23年1月26日～ 平成23年5月31日	新規養成女性研究者公募（再公募） （情報電気電子工学専攻機能創成エネルギー講座）
平成23年3月1日	第6回 Women in Science 開催
平成23年3月23日	女性キャリア支援座談会「国際色豊かな職場、アメリカ領事館で働く女性達」開催
平成23年5月13日	第7回 Women in Science 開催
平成23年5月18日	平成23年度第1回大学院自然科学研究科男女共同参画推進委員会開催
平成23年6月22日	平成23年度第2回大学院自然科学研究科男女共同参画推進委員会開催
平成23年9月2日～ 平成23年12月16日	新規養成女性研究者公募 （環境共生工学専攻社会環境マネジメント講座）
平成23年9月21日	全学的な男女共同参画推進フォーラム「大学執行部男女共同参画のすすめ」開催
平成23年10月12日	全学的な男女共同参画推進フォーラム×第24回熊大ビジネス講座「NO LIMIT TO YOUR POWER!」開催
平成23年10月27日	第8回 Women in Science 開催
平成24年1月31日～ 平成24年5月1日	新規養成女性研究者公募 （環境共生工学専攻循環建築工学講座）
平成24年3月26日	平成23年度「バッファリングによる女性研究者養成の加速」シンポジウム開催
平成24年5月17日	第9回 Women in Science 開催
平成24年6月13日	平成24年度第1回プロジェクト実施委員会開催
平成24年6月22日	平成24年度第1回大学院自然科学研究科男女共同参画推進委員会開催
平成24年6月28日～ 平成24年11月15日	新規養成女性研究者公募 （産業創造工学専攻マテリアル工学講座）
平成24年7月2日	全学的な男女共同参画推進フォーラム×第27回熊大ビジネス講座「わたしの夢を叶えましょう～自分と未来は変えられる～」開催
平成24年8月31日	平成24年度第2回大学院自然科学研究科男女共同参画推進委員会開催
平成24年10月10日	平成24年度外部評価委員会
平成24年11月20日	女性研究者研究活動支援事業合同シンポジウム参加
平成24年11月27日	全学的な男女共同参画推進フォーラム「『子道具』連れて、研究生活」開催
平成24年12月26日	第10回 Women in Science 開催
平成25年2月2日	平成24年度 熊本県男女共同参画活動フォーラム「世界の女性と歩みと、地域で暮らす私たち」開催
平成25年3月13日	平成24年度「バッファリングによる女性研究者養成の加速」シンポジウム開催
平成25年4月26日～ 平成25年8月30日	新規養成女性研究者公募 （情報電気電子工学専攻先端情報通信工学講座）
平成25年5月15日	平成25年度第1回プロジェクト実施委員会開催
平成25年5月21日	平成25年度第1回大学院自然科学研究科男女共同参画推進委員会開催
平成25年7月12日	第11回 Women in Science 開催
平成25年7月25日～ 平成25年10月25日	新規養成女性研究者公募 （環境共生工学専攻社会環境マネジメント講座）
平成25年7月20日	聞いてみんね！みつけんね！理系のローモデル 開催

実施日	取組内容
平成25年7月28日	フレー！フレー！未来のエンジニア　開催
平成25年7月28日	（同時開催）夏休みの自由研究に対する技術相談会 中学生の理系進路相談会
平成25年8月2日 ～4日	来てみなっせ！乙女サイエンス・スクール in 天草 開催
平成25年8月10日	女子高生のための進路相談会開催
平成25年度	科学技術人材育成費補助事業 「女性研究者研究活動支援事業（拠点型）」開始
平成25年9月2日	平成25年度メンター会議開催
平成25年9月16日	輝く理系女子キャリアパス開催
平成25年9月25日	平成25年度第2回プロジェクト実施委員会開催
平成25年10月30日	全学的な男女共同参画推進フォーラム×第30回熊大ビジネス講座 ワークライフバランスと多様な働き方を推進する企業の取り組み ～「テレワーク」の可能性と企業の選び方～
平成25年11月10日	理系女子プロフェッショナルへの挑戦開催
平成25年11月18日	平成25年度新規養成女性研究者意見交換会開催
平成25年11月11日	女性研究者研究活動支援事業合同シンポジウム2013 参加
平成25年12月16日	第12回 Women in Science 開催
平成25年12月20日	男女共同参画推進フォーラム「男女共同参画社会の形成と大学」開催
平成26年1月28日	平成25年度外部評価委員会開催
平成26年1月28日	平成25年度「バッファリングによる女性研究者養成の加速」シンポジウム開催
平成26年2月 1日	平成25年度熊本県男女共同参画活動フォーラム「IBMの経営とダイバーシティ」開催
平成26年2月 20日	「女性研究者の活躍のために必要な環境整備と女性の採用、エンパワーメントにむけて」開催
平成26年4月 1日～ 平成26年6月30日	新規養成女性研究者公募 （産業創造工学専攻マテリアル工学講座）
平成26年4月10日	平成26年度第1回大学院自然科学研究科男女共同参画推進委員会開催
平成26年5月14日	平成26年度第1回プロジェクト実施委員会　開催
平成26年7月 1日～ 平成26年12月10日	新規養成女性研究者公募 （産業創造工学専攻マテリアル工学講座）
平成26年7月9日	平成26年度第2回プロジェクト実施委員会開催
平成26年7月11日	第13回 Women in Science 開催
平成26年7月20日	聞いてみんね！みつけんね！理系のローモデル開催
平成26年8月1日 ～3日	理科の体験実習 in 熊大＆天草 来てみなっせ！リケジョスクール開催
平成26年8月7日	女子高校生のための進路相談会開催
平成26年10月5日	輝く理系女子キャリアパス開催
平成26年8月25日～ 平成26年8月27日	平成26年度新規養成女性研究者個人面談　実施
平成26年9月 5日～ 平成27年1月 9日	新規養成女性研究者公募 （理学専攻化学講座）
平成26年9月8日	平成26年度第3回プロジェクト実施委員会開催
平成26年9月20日	九州・沖縄アイランド女性研究者支援シンポジウム in 熊本 開催
平成26年9月27日	男女共同参画社会の実現に向けた日独韓からの提言～誰もが暮らしやすい社会をめざして～開催
平成26年10月9日	平成26年度メンター会議開催
平成26年10月24日	平成26年度＜臨時＞プロジェクト実施委員会開催
平成26年11月21日	平成26年度第4回プロジェクト実施委員会開催
平成26年11月26日	女性研究者研究活動支援事業合同シンポジウム2014参加
平成26年11月28日	熊本大学男女共同参画推進フォーラム「男性の育休を通じて考える男女共同参画」開催
平成26年12月4日	「女性研究者研究活動支援事業（拠点型）シンポジウム」女性の活躍とダイバーシティ開催
平成26年12月25日	平成26年度外部評価委員会
平成27年1月15日	平成26年度第5回プロジェクト実施委員会開催
平成27年1月26日	平成26年度「バッファリングによる女性研究者養成の加速」総括シンポジウム開催
平成27年2月15日	平成26年度熊本県男女共同参画フォーラム「日本の未来を明るくする切り札としての男女共同参画社会の実現」開催
平成27年2月18日 平成27年2月23日	平成26年度新規養成女性研究者研究室訪問および、新規養成女性研究者個人面談（追加）
平成27年2月27日	e-learning セミナー「～e-Learning の活用の勧め～」実施
平成27年2月26日～ 平成27年5月 29日	新規養成女性研究者公募 （環境共生工学専攻人間環境計画学講座）
平成27年3月19日～	新規養成女性研究者公募 （理学専攻化学講座）

アンケート結果

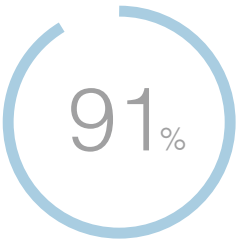
プロジェクト実施委員会では、事業総括としてアンケート調査を実施しました。

- 実施期間：平成 27 年 2 月　● 回答率：62.2%
- 対象者：新規採用女性研究者（新）、メンター教員（既在籍女性研究者を含む）（メ）

アンケートでは、本事業で実施された女性研究者のための支援制度について尋ね、この結果、すべての支援制度について継続して実施されることの重要性が確認されました。

各設問において、「非常に評価」と「おおむね評価」の割合を示した。

1 新規採用女性研究者に対する研究費の支援（初年度 150 万円、その後２年間 100 万円）

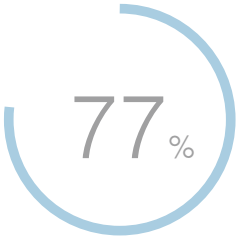


- 若手教員の場合、大きな外部資金を持っていないことが多く、新しい環境を立ち上げる際には、大変助かりました。特に実験系だと設備や機器の出費が高額なため、有効な支援だと思います。（新）
- 実際のところは、女性だから研究費の支給が必要ということではなく、新規採用者に対しては男性であっても重要だと思います。（メ）
- 女性研究者が別の土地に移動することにはいろいろな障害があるので、研究費面で優遇することによって、公募への応募を促進する効果が期待できる。（メ）
- 自分の研究室を初めて持つと言うことで、自前で器材を揃えないといけないところに、まとまった金額の研究費を支給していただけて非常に助かった。（新）

2 新規採用女性研究者及び既在籍女性研究者に対する研究教育スキルアップ経費の支給

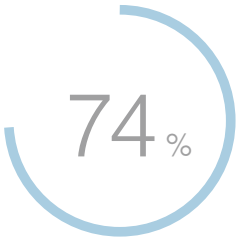
- 同経費の支給をうけたことにより、研究成果の海外への広報において飛躍的なスキルアップを達成できた。（メ）
- 実質的にたいへん有効な援助であり、業績を期待されていることや成果発表の重要性を認識することができて意欲を高めることができる。（メ）
- 女性限定である必要はない。男女の能力は同等。若手全体に支援するなら理解出来る。（メ）
- 国際学会に参加する際には、渡航費に加えて参加登録料も高額であることが多いため助かった。（新）
- 研究費支援があることは該当者（応募者）にとって魅力的だが、教員の職級によって支援は異なるかと思う。研究者としてスタートしたばかりなら要支援でも、ある程度確立した研究者への支援には疑問。（メ）

3 新規採用女性研究者に対する研究スペースの配置



- 研究費と同じくスペースも重要な要素。昔の新任助手はみじめな状況だったことを考えると、これくらいのことはしてあげるべき。（メ）
- 欠員の補充や研究室等に配属という形ではなかったので、確保されたスペースの補償がないため、大変助かりました。（新）
- 女性研究者に限らず、新規採用者または既在籍者に対して、研究スペースは配置されるべきだと思います。（メ）
- これも女性教員だけに限らない問題だが、特に女性教員には配慮が必要なことは理解できる。（メ）
- 既に講座内での実験室の割り当てがあり余分なスペースが無い状態であったので、自然科学研究科の持ちスペースを充てていただけて非常に助かった。（新）

4 新規採用女性研究者に対するメンター教員の配置



- 本来メンターは重要な機能を果たすべきだが、メンター自身が自分の果たすべき役割を理解していない事例もあり、メンターの教育やメンターとしての活動を評価することも重要。（メ）
- とくに、先輩の女性教員から研究活動や日常生活に関するアドバイスを受けることは、心の支えになる。（メ）
- 分からないことが生じたときに、遠慮せずに相談してよい教員が居るので、心強かった。その一方で、３名でなくとも１～２名程度でも良かった。メンターに適任ではない教員もいるので、メンターの適任審査などを事前に行って欲しかった。（新）
- 誰に相談すれば良いかも明確で、メンターも相談されたときのみならず、サポートする意識が常にあるので、個人で独立して研究室を作っていかなければならない新規研究者にとっては男女を問わず有効な体制であると思う。（メ）

5 新規採用女性研究者に対する研究支援員雇用経費の支給

77%

- ライフイベントにある女性教員への研究支援員はもし適切な人材が得られるなら、極めて有効。問題は適切な人材がえられるかどうかである。（メ）
- 出産前後の休暇を予定している女性教員は、外部資金の申請がしにくく、研究費に関しては非常に不安感がある。この期間の助成は必須だと思います。（メ）
- 新規だけでなく既在籍女性研究者に対しても必要であり、支援員だけでなく、その研究者でなければならない業務も多いので、学会中の保育や病児保育などにかかる保育費用を補助することの方が有用であろうと思います。（メ）
- 重要という以上に必要不可欠だと考える。ただし、新規採用の女性だけではなく、既在籍者、男性に対しても支援があるべき。（メ）
- 「研究費の支給」を交えて、継続支援があってもよいと思う。（メ）

6 自然科学研究科女性教員と大学院生の懇談会開催（Woman in Science 等）

73%

- ロールモデルとしての女性教員の存在とその体験談を聞くことは女子大学院生にとっては極めて意味のあること。（メ）
- 女性研究者の裾野拡大にとても重要だと思います。もう少し、日本人の大学院生が参加してくれると良いと思います。（新）
- 女子学生のキャリア設計を考えるのであれば、学部学生との懇談会も必要。（メ）
- 新規採用された教員にとっては、ネットワークを作ることができて有用であるとは思うが、実際に大学院生の出席が少なく、「教員と学生の懇談会」という役割を果たしているかどうかについては疑問。（新）
- このような会に、大学院生のみならず、男性教員も集まるようになると良いかと思う。（メ）

7 女性研究者シンポジウムの開催：新規採用女性研究者を含む自然科学研究科女性研究者の研究成果発表

61%

- このようなシンポジウムに出席するのは限られた人だけではあるが、この取り組みの重要性と意義を確認する意味で重要。また女子大学院生の出席も増えればさらに意義がある。本来は管理職にある人たちは必ず出席すべき性質のものと考える。（メ）
- 他分野の女性研究者どうしの研究内容の情報交換となる。（メ）
- 学内の研究者との交流や、研究成果に対するご意見をいただける場として有効でした。学長等の前で研究成果を披露できるのは、良い励みとなります。（新）
- すべてに参加できていないので残念ですが、参加するといつも刺激を受けています。ただ、関係ある女性教員を中心とした一部の教職員だけのものになっているような気がしています。（メ）

事業を振り返って

熊本大学学長特別補佐
（男女共同参画担当）

大学院自然科学研究科
教授
岸田　光代

平成22年度に開始した本事業を通し、13名の女性教員を採用するこができました。転出などがあり、プログラム終了時には11名が本研究科に在籍することとなりましが、プログラム開始前に８人であった女性教員が20人となり、大変心強く感じています。割合はまだまだとても低いですが、彼女たちの今後の活躍が大きく期待され、学生たちへも良いロールモデルとなり、大学の風景も変わっていくことと確信しています。

今後はこのバッファリングシステムを全学展開し、さらに女性研究者増加を推進することとなったことに、この事業が熊本大学にもたらした影響の大きさを感じます。大学が女性教員を含めた多様性を推進することは、あらゆる側面でグローバル化が進むなか、よりよい教育・研究を推進するうえで欠かすことができません。今後も引き続き、男女かかわらず働きやすい環境を整えることの重要性が理解され、誰もが力を発揮できる大学となることを期待しています。

編集・発行

国立大学法人
熊本大学大学院自然科学研究科
〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪２丁目39番１号
TEL:096-342-3527　FAX:096-342-3010
http://www.gsst.kumamoto-u.ac.jp/

（H27. 3.31）